(Memoirs of Babur 二二九頁。二〇八頁、二二二頁をも參照)と言つた程の處で、大王も法師と共に、それぞれ此處で一段の覺悟を見せてゐるのは面白いことである。即ち、アレキサンダーがアテナの神に犧牲を捧げて新計劃の幸先を祈り、部下軍隊を部署して作戰の火蓋を切つた處は、正に此のラムガーン境界の地であり、玄奘法師が其の旅行談中に印度の概況を挿入したのも矢張り同地に於てであるが、要するに、兩人共に恰も神の約した地の入口にでも着いた程の感じを抱いたからに外ならぬのは言ふまでもない。それからの一日行程では猶ほ兩者の道行が一致し、共に凡そ同一の地點で(恐らく現時のマンダラワール Mandarawar 村落の附近であらう) アリシャン Alishang 及びカオ Kao (Choés) の名で知られてゐるアリンガル Alingar の兩急流を併せた川を渡つたものである。此の川は深くはないが、流が急で底の小石は滑るから渡るには危險である。それから暫く兩者の徑路は別々になり、大王は部下の輕裝縱隊を率ゐて西北クナル Kounar (Choaspés) 谿谷に進入し、バヂャウル Badjaur 山スワート Swât 山地方で一年を費し、部下の將卒に數多の死傷者を出し、自身